

日本 SPI コンソーシアム(JASPIC)設立趣意書

1. はじめに

IT 革命が声高に叫ばれる現代社会において、その中核を担っているのがソフトウェアであることは言を待ちません。企業における情報処理システムはもちろん、家電機器などでさえコンピュータ制御はもはや常識であり、我々は複雑多岐な機能を備えたソフトウェアなしでは文明的な生活を維持することができなくなっています。

このような時代に、利用者のニーズを的確に捉えた高品質・高付加価値のソフトウェアを低コストでタイムリーに開発し提供することは、現代のソフトウェア開発組織に与えられた最優先の課題であります。

そして、優れたソフトウェアを開発・保守していくためには、個々の技術者の能力や資質だけに頼るのではなく、高品質・高生産性を達成できる工学的に安定したソフトウェアプロセスを確立する必要があります。このためには、自組織のソフトウェアプロセスの長短所を客観的に評価・認識し、現場に密着した地道な改善活動に常に励む必要があります。

昨今では、ソフトウェアプロセスを評価する枠組みとして、米国カーネギーメロン大学ソフトウェアエンジニアリング研究所が開発した「能力成熟度モデル CMM(Capability Maturity Model)や、ISO(国際標準化機構)/IEC(国際電気標準化会議)において国際標準化が進められている「ISO/IEC 15504: ソフトウェアプロセス評価」、ISO 9000 シリーズなど様々な枠組みが提案され、世界中の先端的組織で導入・活用されています。

しかし、一方で、ソフトウェアプロセスの「改善」という最も重要な局面については、個々の組織が「SEPG(Software Engineering Process Group)」などと呼ばれる部署を設置し、試行錯誤を繰り返しながら具体的な活動を行なっていかなばなりません。

我々日本 SPI コンソーシアム(JASPIC)は、全力を傾注してこのような地道な改善活動に日夜励んでいるプロセス改善担当者が、社会組織の壁を超えてプロセス改善に関して各自の経験や技術を交流し合うための場を提供し、「プロセスチャンピオン」と呼ばれるプロセス改善成功者を養成して行くための非営利の団体を目指し、現在、2000年10月設立を目前に、以下の発起人会社一同にて設立準備を進めております。

皆様も是非、JASPIC 設立の主旨をご理解いただき、JASPIC にご入会いただきますようお願い申し上げます。

JASPIC 設立発起人

2. 設立の目的

JASPIC は、21 世紀の世界で利用される様々な社会システム、産業システムや各種の工業製品などの開発の中核をなすソフトウェアプロセスの改善(以下 SPI と言います)および SPI に伴うプロセス評価(以下 SPA と言います)に関して、以下を行なうことを目的とします。

- (1) SPI および SPA に関して会員相互間の技術的・人的交流を図り、会員各自の技術力向上と技術移転の促進を図ります。
- (2) SPI および SPA について、技術 / 方法論 / モデルの研究を行ないます。
- (3) 我が国における SPI および SPA に関する社会的認識と技術水準の向上を図るため、上記の活動の成果を活かして、SPI および SPA に関する啓蒙・普及活動を行ないます。
- (4) SPI および SPA にかかわるグローバルスタンダード確立に向けた国際貢献や、世界各国におけるカンファレンス等を通じた SEPG の国際交流を行ないます。

3. 活動の概要

JASPIC は、上記の目的を達成するために、現段階では次のような活動を行なうことを予定しています。

3.1 会員相互間の技術的・人的交流のための研究会、講演会、セミナー等の開催

具体的には、会員各位から研究員をご登録いただき、年間 10 回程度の研究集会を開催する予定です。各研究集会では、会員各位による事例検討や意見交換、最新技術動向の紹介などを行なっていく予定です。

なお、研究集会にて具体的な事例について突っ込んだ意見交換を行なっていただくために、研究員は登録制(メンバー固定)とし、技術資料や成果物の取扱いについても十分な配慮をさせていただきます。

3.2 技術情報の収集及び配布

日夜プロセス改善に励む実務者の方々に最新の技術動向をタイムリーに提供するために、電子メールのメーリングリストなどを活用した情報交換の枠組みを提供します。

3.3 SPI および SPA に関する啓蒙・普及活動となる公開セミナー、ワークショップ、シンポジウム等の開催

JASPIC 会員各位の活動を世間に知らしめて SPI および SPA に関する社会の認知度を高めて行くとともに、会の外部の方々との人的交流や意見交換を行なうために、将来的には会員以外の方もご参加いただける公開のイベントも企画したいと考えています。

3.4 本会が目的を遂行するために必要な、SPI あるいはソフトウェアに関する各種団体との交流や支援

ソフトウェア技術者協会のプロセス分科会・CMM 研究会、ISO/IEC 15504(ソフトウェアプロセス評価)規格案担当委員会、情報処理学会ソフトウェア工学研究会プロセス改善部会などの国内諸団体や、カーネギーメロン大学ソフトウェアエンジニアリング研究所などの国外諸団体など、SPI や SPA について活動を行なっている諸組織と積極的に交流・情報交換を行ないます。

3.5 CMM, CMMI の日本語化に対する支援

SPI および SPA に関する技術文書の多くは英語で記述されています。これらを我が国で普及させ、浸透させるためには、我々がその技術に日本語で触れられるか否かが重要な鍵となります。このような言語の壁を取り払うために、ソフトウェア技術者協会のプロセス分科会・CMM 研究会(SEA-CMM)の活動を支援します。

補足: SEA-CMM では、米国カーネギーメロン大学ソフトウェアエンジニアリング研究所(CMU-SEI)が開発した SPA の枠組みである「能力成熟度モデル CMM 1.1 版」の我が国での普及を支援するために、CMU-SEI との契約の下に、メンバーのボランティア活動によってこれを翻訳した公式日本語版を 1999 年に発行し、WWW にて電子媒体を無料公開しています(<http://www.iijnet.or.jp/sea/> ただし製本版は実費頒布)。

このような活動は SPI および SPA の普及には非常に有意義かつ重要ですが、それを小人数のボランティアによる手弁当の活動に頼るのは無理があるのも事実です。そこで我々 JASPIC は、2000 年 8 月に第 1.0 版が公開された CMM の次世代版 CMMI-SE/SW (Capability Maturity Model - Integrated for Systems Engineering/Software Engineering) の日本語化について、SEA-CMM の翻訳活動を全面的に支援していく予定です。

具体的には、2000 年中にも翻訳支援チームを編成し、会員各位の研究員に研究会などで下訳段階の原稿の勉強や文案レビューにご参加いただきます。これらの活動にご参加いただくことで、未確定版とはいえ日本語に訳された CMMI-SE/SW を一般の方よりも 1 年以上早い段階で入手でき、SEA-CMM の専門家を交えた研究会で内容を詳細にご理解いただける場にご参加いただけます。

3.6 SPI 及び SPA 関連文書の発行

SPI や SPA の普及を促進するために、CMM や CMMI などのモデルに関連する解説、教材、関連資料などの翻訳や著作などに取り組んでいきます。

4. 会の運営

JASPIC の運営は、会員の互選による役員(理事長 1 名、理事 7 名、会計監事 1 名)からなる理事会の総括の下、会員各位から各 1 名ずつ委員をご登録いただく運営委員会が中心となり、会員各位のご意見・ご希望に沿った形で運営して参ります。

また、研究集会での意見交換をより具体的かつ高度な内容とするために、研究集会への参加資格は会員のみ、かつ、事前に会員各位よりご登録いただく研究員の方のみに限らせていただきたいと思いますと考えております。これら研究員の方々には、会員各位が安心して突っ込んだ議論ができるように技術資料や成果物の取扱いに関する取決めを交わしていただく予定です。

さらに、SEA-CMM をはじめとする SPI および SPA に関する専門家の方々に本会の活動へのご支援をいただくために、特別会員制度も設ける予定です。

なお、JASPIC の事務局は、(株)SRA 先端技術研究所 殿のご厚意により、同社内に置かれる予定です。

5. 会員の特典

JASPIC にご入会いただいた正会員の方々には、次の特典が予定されています。

- (1) 会員限定の研究集会等にご出席いただけます。
- (2) 会員限定の電子メールメーリングリストにご参加いただけます。
- (3) 運営委員として JASPIC の活動の企画・運営にご参画いただけます。
- (4) CMMI-SE/SW の日本語化支援活動にご参画いただき、日本語版公開前の勉強会・レビュー会にご参加いただけます。
- (5) 各種技術情報、JASPIC 成果物をご入手いただけます。
- (6) JASPIC 主催・共催の公開イベントに、会員特別価格でご参加いただけます。

6. ご入会方法

所定の入会申込書にご記入の上、事務局にお申込み下さい。年会費は1口100万円で、何口でもお申込みいただけます。なお、入会金はいただきません。

ご入会に当たっては、研究員(1口につき、最大7名様)と、研究員を兼ねる運営委員(1ないし2名様)をご登録いただきます。運営委員の方には、会員の代表としてJASPICの運営にご参画いただきます。

なお、JASPICの事業年度は、毎年10月1日から翌年9月31日までの1年間で、年会費は、ご入会の時期にかかわらず、事業年度単位で申受けます。ただし、事業年度後半となる4月～9月に入会される新入会員は、初年度会費を半額免除といたします。また、事業年度中の会費口数変更や払込済の会費の返却はお断りします。

7. その他

ご不明の点等については、ご遠慮なく下記のJASPIC事務局にお問い合わせ下さい。

日本SPIコンソーシアム(JASPIC)事務局

E-mail: admin@jaspic.jp

住所: 〒160-0004 東京都新宿区三丁目12番地 丸正ビル5F
(株)SRA 先端技術研究所 内

電話: 03-3357-9011(担当: 松村、林、バベジャ)

Fax: 03-3351-0880(担当: 松村、林、バベジャ)

以上

日本 SPI コンソーシアムの設立に寄せて（１）

ソフトウェアが社会生活を支えていると言われてから久しいですが、情報技術(IT)時代の到来で、それは新たな段階に入りました。かつて家庭にあるモーターの数で技術文明の浸透が測られましたが、いまや、コンピュータチップの数がそれに代わりました。日本のお家芸である高品質の装置や家電品といった工業製品は、かつて機械部品や電子部品の固まりでしたが、安価になったチップとネットワーク化によって、ネットワーク機能を含む製品機能の大部分をソフトウェアが担うようになりました。とくに、万一問題が起きると災害をもたらすシステムや機械の多くはコンピュータで制御されているので、それを動かしているソフトウェアは、ときには人命を脅かしかねない重大な社会的責任を担うに至っているのです。

IT化は、全コスト中のソフトウェア開発・保守コストの割合に急激な増加をもたらし、それが全体の半分以上を占める製品は珍しくなくなりました。その結果として、ソフトウェアに起因するトラブルも、産業や社会のあらゆる局面で急激に増加しています。開発の場では、ソフトウェアの開発が大幅に遅れたために、製品の出荷やシステムの稼働開始が遅れ、ビジネスが苦境に陥った例は、枚挙にいとまがありません。開発コストが何倍にも膨れ上がって、ビジネスの成立を困難にすることもしばしばです。稼働中の場では、出荷または稼働中のバグによって、製品のリコール、回収、予期せぬ対策費の増加はまだしも、巨費を投じたメガプロジェクトを失敗に追い込み(例えば、ヨーロッパの新型ロケット Ariane-5 のソフトウェアバグによる失敗)、ときには人の生命を脅かしています(例えば、放射線治療器 Therac-25 のソフトウェアバグによる多数の患者の大量放射線被曝)。

こうして、ソフトウェアが製品やシステムの主要コンポーネントとなるという新たな時代に入ったにもかかわらず、「無形物」という、人類がかって扱ったことのない、極めて複雑でとらえにくい工業製品を、例えば、オブジェクト指向のような新たな技術や業者が売り込むツールを導入して、たちどころに生産性や品質が数倍になると期待したり、ハードウェアの部品と同じ感覚でソフトウェアの価格を叩いて一番安い素人プログラマしかいないところに発注する、といった、従来の有形物の製品やシステムと同じような感覚で、扱えばすむと考えている人がたくさんいます。また、ソフトウェアに起因する問題の重大さに気づいていたとしても、それを改善する手がかりを持たずに、十年一日のように、同じやりかたを続け同じトラブルを繰返している組織も多いのです。

どんな仕事でも、よりよい結果を得るには、仕事を構成するプロセスの一つ一つをよりよくしていかなければなりません。ソフトウェアのようなプロセスの結果が直感的に見えにくい無形物では、プロセスにほとんどすべてを依存するために、プロセスの結果がすぐに形に現れる有形物よりも、このことは決定的に重要なのです。

ソフトウェアのプロセスが旧態依然である状況を改善するために、いろいろのソフトウェアプロセスモデルが作られました。そのなかで、公開の場で徹底的に論議され、何回かの改訂を経て、教育や改善のための関連資料が整備され、いまや世界中でもっとも広く使われているのが、カーネギーメロン大学、ソフトウェアエンジニアリング研究所(CMU-SEI)が開発した CMM: Capability Maturity Model(ソフトウェア能力成熟度モデル)です。それを是非とも日本で普及させたい、という願いから、ソフトウェア技術者協会(SEA)の SPIN (Software Process Improvement Network)の有志による、2年間に及ぶボランティア作業の結果、SEI との公式契約に基づき、CMU/SEI-93-TR-24 及び TR-25 を日本語に翻訳し、1999年5月10日 CMM の日本語版を公開致しました。その後正誤表の公開を経て、2000年8月現在、ハードコピーの頒布部数は、TR-24 が 2,500 部、TR-25 が 2,000 部に達し、Web 上に公開したもののアクセスは、1万件に及びました(正誤表へのアクセスは約 1,100 件)。用語の日本語訳などに吟味を重ねた甲斐があって、幸いにも利用者から高い評価を得ております。

ソフトウェアプロセス改善が世界の産業に浸透するにつれて、製品やシステムの改善のためには、ソフトウェアばかりでなく、これら全体を包含するプロセス改善が必要なことが次第にわかってきました。そこで SEI は、それまで個々に開発されていた各種分野の CMM モデル SW (Software)、SE (Systems Engineering)、及び IPPD (Integrated Process and Product Development) を統合した CMMI (CMM Integration) の開発を開始し、それは 2000 年中に完成する見込みです。

冒頭に述べたように、日本は世界に冠たる高品質産業を維持し、世界市場に君臨してきました。高品質の製品やシステムを供給している多く企業は、この優位を保つために、ソフトウェア問題に取り組むことの重要性に気づき始めました。最近、日本の SEA-SPIN に新規に参加される方の多くがこうした企業に属している方々であることが、それを如実に示しています。当面は、ソフトウェアのみに焦点を合わせた改善でことが足りるでしょうが、製品やシステムを総合的に改善するには、CMMI がより有効であることは言うまでもありません。そこで、CMM の翻訳プロジェクトに参加した有志は、CMMI の日本語版の作成を企画しました。

しかし、CMM の公式日本語版の作成を通して、我々は次のことを学びました。

1. この作業は完全な奉仕活動だけでは、完了までに時間がかかる。したがって、コンソーシアムから資金を導入し、必要な対価を支払って外部の専門家に翻訳作業を発注し、レビューに専念することにより、短期間で仕上げることを目指す。
2. プロセス改善の産業への普及は、個人のボランティア活動だけでは十分でない。ワークショップ、セミナー、広報活動、企業間の智恵の交換や切磋琢磨の場としての公開の SEPG コンファレンス、教育資料整備、その他もろもろの仕事を企業同士の協調(ボランティア)活動としてやっていかねば、目的とする成果は得られない。
3. コンソーシアムを通じて CMM/CMMI の利用者が積極的に翻訳に参画し、普及を図ることができる。

これらのことから、我々は、関心の高い企業から資金をいただき、コンソーシアムを設立する決意を致しました。上述の経緯を踏まえ、是非、お力添えをお願いする次第です。

2000 年 8 月 19 日
Office Peopleware
松原 友夫

日本 SPI コンソーシアムの設立に寄せて（２）

われわれが CMM の考えに出会ってから、もう 10 年近くになります。CMM に出会うまでのプロセス改善は、技法の導入とか開発環境の改善といったものが中心で、それはそれで個別に成果をあげてきましたが、全体としては相変わらず多くの未解決の問題が散在していました。

このような中、CMM はプロセス改善項目の優先順位を示し、中長期的なプロセス改善戦略を策定する上で大変有効なモデルとして、世界的に注目を受けて広がっていきました。しかし、残念ながら CMM に関するドキュメントは英語であり、日本においてはごく一部の人が注目し活用しているに過ぎない状態でした。そこで SEA-SPIN の有志が集まり、CMM を正しく日本に伝え、そしてレベル達成競争のような誤った使われ方がされないようにと、ボランティアで公式日本語版を作成することになりました。

この公式版の完成により、プロセス改善に CMM の公式アセスメントを活用する企業も増え、また企業間の情報交換も、CMM のモデルをベースにすることで活発化することができたと思っています。

今回、CMM を発展させた CMMI がカーネギーメロン大学、ソフトウェアエンジニアリング研究所からリリースされたのを受けて、CMM の翻訳に参加した有志が、CMMI の活用によるソフトウェア開発のみならずシステム開発のプロセス改善にも貢献したいということで、CMMI の日本語版の作成を企画しています。

CMMI 日本語版の完成によって、日本におけるプロセス改善がさらに推進されるものと期待されますが、CMM や CMMI はあくまでもモデルであり、実際にプロセス改善で活用して改善成果を得るには、深い知識が必要になります。

深い理解なしに CMMI の活用を進めると、ビジネスゴールとはかけ離れた安易なレベル達成競争という、誤った方向に行く危険性が十分に考えられます。そこでコンソーシアムを設立し、CMMI が正しくそして広く活用されていくための活動をしていこうとしています。コンソーシアムではその設立趣意書にあるように、参加企業の SEPG の教育と企業をまたがった情報交換を第一の目的に掲げています。

プロセス改善には幅広く、またいろんな視点からの知識や経験が必要です。これらのことを自分だけで、または自社内だけで経験したり知識をまとめたりということは、ほとんど不可能が大変効率の悪いものです。そのため企業をまたがった情報交換は大変有効なものになるわけですが、これまではあまり活発なものではありませんでした。その理由はいくつかあると思いますが、大きな二つをあげますと、ひとつは企業をまたがって議論できるようなベースとなるモデルが無かったこと、もうひとつは各企業が自社の情報を外部に出したがいなかったことがあると思います。

ひとつ目の、議論のベースとなるモデルが無かった点は、CMM や CMMI の出現によって解決してきていると思います。ふたつ目の、情報を企業の中でクロードにしようという文化はまだまだ根強く、これから変えていく努力が必要だと思っています。商品情報や経営数値のように、社外に漏れると即刻自社が不利になる情報とは異なり、プロセス改善にかかわる情報はそのまま他社で役に立つといったものではなく、その情報を自社なりに噛み砕いて理解する能力と、その知識を使って改善を推進するという努力があって初めて役に立つものです。

同じように情報を提供しあっても、受け手の能力と努力の違いによって得られるものは大きく変わってきます。しかもそれらは自分たちだけの経験ではなかなか得られない、貴重なもののはずです。

以前から企業をまたがったプロセス改善に関する情報交換を活発化したいと考えていましたので、今回のコンソーシアムの設立には大変期待するところがあります。ぜひともたくさんの企業から参加いただき、そこで得られた知識を元に大いなる工夫と努力でもって、それぞれの企業でのプロセス改善の成果をあげていただきたいと思います。

2000年8月19日
ソフトウェアプロセス改善(SPI)コンサルタント
坂本 啓司